

# 平家物語についての研究

— 仏教思想と女人たち —

澤 田 淳 子

## 目 次

はじめに

第一章 『平家物語』の仏教思想

第二章 妓 王

第一節 悲運の白拍子

第二節 白拍子の地位

第三節 信仰に生きる

第三章 建礼門院

— 「灌頂巻」より —

第一節 世の後宮徳子

第二節 六道を生きる

おわりに

はじめに

安芸の敵島神社——満潮時海上に影を落とす朱塗りの大鳥居と華麗な社殿により、日本三景の一つとしてその美景を誇っている。

今から八百年前、時の権力者平清盛が一門の繁栄を願い、現社殿の基礎を造営した。平家の尊信厚かった歴史ある神社である。広島に住んでいる私にとっては愛着が深く、ここ十数年初詣を怠った事がない。したがって、『平家物語』にも以前から関心があったわけである。さらに一年次で『平家物語』を学ぶにあたり、それは次第に深まっていた。

『平家物語』は源平の盛衰をあつかった軍記として有名である。それはとりわけ平家を主軸とし、壮烈な合戦の中に歴史の惨酷さや悲哀・運命の皮肉をしみみ味あわせていた。読むたびに軍記の文章の迫力に驚かされながら、私はこの作品に流れる仏教思想というものに強く心を引かれたのである。この論文は、男たちの合戦記や運命には触れないで、その戦乱の世を男たちの陰でひっそりと生きた二人の女人を追ってみたいと思う。第一章は『平家物語』の仏教思想についてまとめ、第二章では庶民階級の女性の生き方について「妓王」をとり挙げた。そして第三章では支配者階級の女性の生き方を「建礼門院」を通して見て行き、人間が最終的に望むものとは何かについて考えてみたいと思う。

なお、原文はすべて武蔵野書院の昭和校訂『平家物語』流布本（野村宗朔校註）から引用し、（ ）内は出典とページを表わす。

## 第一章 『平家物語』の仏教思想

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を顯す。驕れる者久しからず、只春の夜の夢の如し。猛き人も遂には滅びぬ、偏に風の前の塵に同じ。（卷第一）

### 「祇園精舎」・1

この「祇園精舎」は、『平家物語』の巻頭文としてあまりにも有名である。仏教的な内容、それにふさわしい専門用語、対句、比喩をきかした美文調。まことに何度読んでも飽きない名文である。ここには諸行無常・盛者必衰の理法、すなわち作者の世界観と思想が述べられており、その点で、『平家物語』の全編がここに要約されているのである。それが末尾の「灌頂巻」と照応して、物語の統一が保たれているといわれている。

それでは『平家物語』の「世界観と思想」はどのようなものだったのか。

『平家物語』は全編を意識的な世界観である盛者必衰・因果応報・往生浄土の思想によつて構成されている。つまり、全体に色濃く仏教思想が打ち出されているのである。例えば、『平家物語』の中で、仏教の教理や經典の一部・解説が明らかに出てくる巻として、巻十の「戒文」や「維盛入水」が挙げられる。

罪深ければとて、卑下し給ふ可からず。十惡五逆廻心すれば往生を遂ぐ。功德少ければとて、望みを絶つべからず。一念十念

の心を致せば來迎す。專稱名號至西方と釋して、専ら名號を稱ずれば、西方に至り、念々稱名常懺悔と宣ひて、念々に彌陀を唱ふれば、懺悔するなりとぞ教へけり。

### （卷第十）「戒文」・486

なかんづく、御出家の功德莫大なれば、先世の罪障は皆亡び給ひぬらん。若し人あつて、七寶の塔を立てん事、高さ三十三天に至ると云ふとも、一日の出家の功德には及ぶべからず。又人あつて、百千歳が間、百羅漢を供養したらんずるよりも、一日の出家の功德には及ばずとこそ説かれたれ。

### （卷第十）「維盛の入水」・511

また、とうてい仏教とは関係のなきさうな合戦談の中にも、この思想は出てきている。

去年信濃を出でしには、五萬餘騎と聞えしが、今日四の宮河原を過ぐるには、主従七騎になりけり。まして中有の旅の空、思ひやられて哀れなり。

### （卷第九）「河原合戦」・414

ただし、この世界観は、その当時としてはありきたりの、ごく一般的なものであった。明日をも知れぬ戦乱の世に生きる人々は、このような観念や思想を持つことで醜い現実を否定し、清らかな彼岸の世界への夢を馳せたのであろう。物語中の平氏は、作者の世界観を端的に表白するものだとされている。そこには、「同じ宗教的なものの考え方に発生する因果応報の思想がからみついてゐて、『盛者必衰』の観念を一層正当化し、根底づけ」（永積安明・『平家物語』・249）たところがある。平家は滅びる運命にあつたばかりでなく、清盛や一門の驕慢と横暴によつて滅びなければならなかつた一

族であった。このような運命を背負っている人間たちの唯一の救いは、浄土への往生、彼岸の生活であり、「灌頂巻」に編成された建礼門院の御一生こそ、その典型的なものといえよう。

この『平家物語』の主調である「盛者必衰の理」は、物語中の女人たちにも例外ではなく、例えば、妓王・仏御前・葵の前・小督・建礼門院など、いずれも皆「盛者必衰」というはかない世の中を生きていった人々である。『平家物語』では、この女人たちの生き様を女人哀話として書き留めている。私は、これらの女人の中から「妓王」と「建礼門院」をとり挙げて、当時の女性がいかに浄土に憧れ、仏道を重んじていたか、また、どのようにして安らかな境地に達することができたかについて考察してみたいと思う。

## 第二章 妓王

妓王の話は、新興遊女である白拍子を素材にして、その階級の中で生きる女性たちの盛者必衰の話を通し、女性の救いが浄土宗的な仏法にあったということを語った説話として有名である。ここでは、絶対権力者によって当時の庶民階級がどのように翻弄され、そしてどこに救いを求め、どのように救われることができたかを考えしてみよう。

### 第一節 悲運の白拍子

天承二年(一一三二)三月十三日、備前守平忠盛は、鳥羽院の御願寺得長壽院を御造り申し上げた功によって、清涼殿の殿上の間に

伺候することを許される。ここに平氏は、この後二十年余りに及ぶ権勢の基礎を固めたのである。その忠盛朝臣の嫡男が『平家物語』の主人公・第一の権力者であり、悪役として登場する太政入道清盛である。彼は仁安三年(一一六八)二月入道(浄海)となり、六波羅に邸を構えたが、その所行は全く横暴で、「妓王」の冒頭にも次の様に記されている。

太政の入道は、かやうに天下を掌の中に握り給ひし上は、世の誹をも憚らず、人の嘲をも顧みず、不思議の事をのみし給へり。(巻第一「妓王」・11)

妓王のことも、猛き人清盛の行った「不思議の事」の一つとして挙げられている。

白拍子だった妓王は、清盛の寵を一身にあつめ時めく幸運に恵まれた。ところが、ある日突然西八条の邸を訪れた若い仏御前に清盛の愛は移ってしまい、妓王は邸を放逐され、はては清盛の薄情を恨み、世を厭って尼姿に身を替え、嵯峨の草庵に籠もって仏道修行に勤しんだ。仏御前もまた、妓王の経験した不幸をやがて自分も見ることになるだろうと予測して、嵯峨の妓王のもとへ訪れてわが身の罪を懺悔し、人生の無常を悟って出家する。そして妓王とその母・妹三人とともに、仏道修行に専念した結果、皆「往生の素懷」(巻第一「妓王」・23)を遂げたのである。

以上がこの物語の粗筋であるが、まずは当時の白拍子について少し触れておきたい。

### 第二節 白拍子の地位

白拍子は、<sup>(2)</sup>「本来は節の名であったのが、その節を持つ歌詞の名

となり、更にその歌詞を歌う遊女の名となつたもの」といわれている。本文にも、

抑々我が朝に白拍手の始りける事は、昔鳥羽の院の御宇に、  
島の千歳・和歌の前、彼等が舞ひ出したりけるなり。始は水干  
に立鳥帽子、白翰巻をさいて舞ひければ、男舞とぞ申しける。  
然るを中頃より、鳥帽子・刀をのけられて、水干ばかり用ひた  
り。さてこそ白拍子とは名づけけれ。

(巻第一 「妓王」・12)

との説明がなされているが、前説に従えば、ここに記された和歌前・島千歳も早く世に出た白拍子舞の名手としての遊女であり、この二人が白拍子舞を興したというよりも、白拍子舞を舞う遊女の始めだったのである。彼女らは、これまでの貴族を相手としてきた遊女たちとは違い、武士の間で寵愛された、つまり新興遊女であった。

さて、妓王の時代から少し下つた頃、平家一門が壇の浦の藻屑となり果て、今や源頼朝が新しい武家社会である鎌倉幕府を創立しようとしていたその頃、この時代で最も有名な白拍子が現れたのである。即ち静御前、源義経(頼朝の異母弟)の愛妾である。彼女の物語は、頼朝・義経兄弟の政争の随所にあらわれてくるが、中でも吉野山で義経と別れた彼女が、鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮にて、將軍頼朝や多くの武士を前にして少しも怖じけることなく堂々と舞いつつ歌つた静やしず静のおだまき繰りかへし昔を今になすよしもがなの哀歌はあまりにも有名である。

ここでこの静御前の事を挙げたのは、これから述べようとする妓王や仏御前の人物像と何らかの関連があるように推察したからである。

白拍子という遊女は、身分のある人々から見れば、単なるただの遊びめであり、玩具に過ぎなかった。その薄幸な人生を彼女たちはどのように生き抜いたかを私は考えてみたい。

### 第三節 信仰に生きる

太政入道清盛が天下を思うままにしていたころ、「京中に聞えたる白拍子の上手、妓王・妓女」(巻第一 「妓王」・11)という妹がいた。姉の妓王を清盛が寵愛していたので、妓王一家は立派な家を新築してもらい、その上毎月米百石・錢百貫を贈られたので、一家は繁昌し、その裕福ぶりは限りなくめでたいものだった。

京中の白拍子ども、妓王が幸のめでたき様を聞いて、羨む者もあり、猜む者もあり。羨む者どもは、あなめでたの妓王御前の幸や。同じ遊女とならば、誰も皆あの様でこそありたけれ。如何様にも妓と云ふ文字を名に付きて、かくはめでたきやらん。いざや我等も付きて見んとて、或は妓一・妓二と付き、或は妓福・妓徳など付く者もありけり。猜む者どもは、何でふ、名により、文字にはよるべき。幸は只先世の生れ付きでこそあんなれとて、付かぬ者も多かりけり。

(巻第一 「妓王」・12)

というこの場面は、妓王が幸のめでたき様について、他の白拍子たちがうわさし合っているところであるが、これは巧妙な一つのサスペンスであり、聴者をして、果たしてこの妓王の運命が、『平家物語』の基調である盛者必衰の理に即しているか否かを賭けさせる一つの技巧であるとされている。しかもこの一節は、同時にこの説話

が白拍子という一つの階級を対象とした説話であることをはっきりと示しているのだ。妓王の悲劇は、同じ階級の女性である仏御前に、清盛から寵をうけるという当時最も「幸のめでたき様」とされ、清盛から寵をうけるという当時最も「幸のめでたき様」とされていた位置を奪われ、一介の「遊女」として扱われて行くところにある。つまり、同じ白拍子として恋の敗者となったところに悲劇があるのである。

盛者必衰は、清盛の愛妾として世の栄耀栄華を一身に集めていた妓王には無縁であるかのように見えたが、「かくて三年と云ふに」(巻第一「妓王」・12)思いがけない破局がおとずれる。若くて美しい白拍子の名人が現われたのである。名前は仏、年は十六歳、清盛はたちまち彼女に心を移してしまふ。そればかりか、即刻に妓王を邸から追放してしまふのである。妓王や仏御前の驚きは一通りではなかつた。退出に当たり、妓王は歌一首を襖障子に書き記す。

崩出づるも枯るゝも同じ野邊の草何れか秋にあはで果つべき  
「崩出づる」を仏御前に例え、「枯るゝ」を自分に例えながら、今新しく寵を得た仏御前も寵を失つた自分も、絶対権力者の清盛からみれば同じ野邊の草―同じ白拍子の階級にすぎないのだから、結局は同じ運命をたどることになるのだと暗示しているのである。またこの歌には、『平家物語』の基調である盛者必衰の無常観が秘められ、同時に前出の「京中の白拍子ども、……」という一節に対する答ともなっている。

佛もむかしは凡夫なり  
我等もつひには佛なり  
何れも佛性具せる身を  
隔つるのみこそ悲しけれ

これは、妓王が再度清盛邸に召された折歌った今様であるが、我が身と仏御前との境遇の差をそれとなく折り込んでゐる。私はこの妓王の哀歌を読むたびに、先に仏御前が歌った今様

君を始めて見る時は

千代も經ぬべし姫小松

御前の池なる龜岡に

鶴こそむれゐて遊ぶめれ

を思い出す。それは、両者の位置の逆転をはっきりと見る思いがするからである。

さて、妓王は一旦は死を覚悟するが、家族のことを考えるとそれもかなわず、ついに二十一歳の身で尼姿となり、嵯峨の山里に草庵を結び、母娘三人ともに念仏生活にはいったのだった。そして七夕の静かな夜、思いがけなくも仏御前が訪ねて来たのである。

本よりわらはは推參の者にて、既に出され參らせしを、わごぜの申し状によつてこそ召返されても侍ふに、女の身の云ふがひなき事、我が身を心に任せずして、わごぜを出させ參らせ、わらはが推留められぬ事、今に恥しう傍痛くこそ侍へ。

(巻第一「妓王」・21)

と、妓王を心ならずも追ひ出してその座に自分が居すわつたこと、心苦しさを述べ、妓王に許しを乞う彼女はすでに尼姿になっていた。わずか十七歳の若い身そで、しかも清盛の愛情に何らの不満も不幸もない境遇なのに、

娑婆の榮花は夢の夢、楽しみ榮えて何かせん。人身は受け難く、佛教には遇ひ難し。この度泥梨に沈みなば、多生曠劫をは隔つとも、浮び上らん事難かるべし。――(中略)――一旦の榮花

に誇って、後世を知らざらん事の悲しさに、……

(巻第一 「妓王」・22)

と、自ら愛欲の世界を越えて尼となった彼女こそ、中世的な新しい型の女性といえるのである。ところで、彼女は二節で述べた静御前とどこか似ている。仏御前は自我の強い性格で、打てば響く機敏な気転を持った女性であり、妓王に比べて遙かに積極的であった。だからこそ清盛の権力を恐れることもなく、彼の意趣に背いて邸を逃れ出ることができたのである。その仏御前と、頼朝の権勢を恐れずその面前で、謀反人とされた義経への恋慕の真情を歌い舞った静御前とその性格が似かよっているように推測される。静御前こそ武家社会に中に生きた中世の女性であり、しかも、その中世的な女性の典型は仏御前であつたと思う。

さて、仏御前の出家に対し、妓王は次のように述べている。

わらはが尼になりしをだに、世にあり難き事のやうに、人もいひ、我が身も思ひ侍ひしぞや。其れは世を恨み、身を歎いたれば、様をかふるも理なり。わごぜは恨みもなく歎きもなし。今年は纒か十七にこそなりし人の、其れ程まで、穢土を厭ひ浄土を願はん、深く思ひ入り給ふこそ、まことの大道心とは覺え侍ひしか。嬉しかりける善知識かな。

(巻第一 「妓王」・22)

即ち、妓王は愛情の悲劇にあつてそれを克服したが、本当の道心をつかむことができない平安朝的な女性だったのである。それが、仏御前の求道「嬉しかりける善知識」によって、「まことの大道心」に導かれたのである。

「この一節は、この説話の最も大事な場面であり、真の意味での妓

王の発心というクライマックスである」といわれている。

結局、この当時の女性はどこに自分たちのほかない身の救いを求めたか。それはいうまでもなく信仰であった。信仰に生きる、これほど絶対的な生き方が他にあるだろうか。権勢というものが、信仰の前にはどれほど無力であるか。この説話では、恋愛よりも信仰に生きることこそが人間の最上の生きる道であることを説いているのである。

### 第三章 建礼門院

——「灌頂巻」より——

「灌頂巻」とは、『平家物語』が巻第一「祇園精舎」から最後の巻第十二「六代斬られ」で完結するのに対し、あとにつけ加えられた巻と考えられているものである。これは高倉帝の中宮建礼門院の後日譚で、昔から非常な名文とされている。本章では、「灌頂巻」に述べられている「壇の浦合戦」以後の建礼門院像を追ってみた、と思う。まずその前に建礼門院の御生涯について記しておく。

#### 第一節 乱世の後宮徳子

建礼門院は本名徳子、久寿二年(一一五五)平清盛と本妻時子(二位殿)との間に生まれ、承安元年(一一七一)十二月高倉天皇の女御として入内し、翌年の二月十日には、晴れて中宮となり、平氏にとって最も華かな時代の幕あけとなった女性である。

臣下の身でありながら、一天万乗の君の御后になった徳子にとつ

て、また、外戚という最上の栄華の道を歩んでいた平家一門にとつて、その繁栄の頂点に達したのは、治承二年（一一七八）十一月、皇子（安徳天皇）御出産にあった。この時の状況を『平家物語』では次のように述べている。

本三位の中將重衡の卿、其の時は未だ中宮の亮におはしけるが、御簾の中よりつと出でて、御産平安、皇子御誕生候ふぞと、高らかに申されたりければ、法皇を始め參らせて、關白松殿・太政大臣以下の卿相雲客、各々の助修・陰陽の頭・典藥の頭・數輩の御驗者、すべて堂上堂下、一同にあつと喜び合はれる聲は、門外までもどよみて、暫しは静まりもやらざりけり。入道相國嬉しさの餘りに、聲を揚げてぞ泣かれける。悅泣とはこれを云ふべきにや。

（卷第三 「御産の巻」・126）

待望の皇子御誕生とあつて、宮中の人々の喜びは大へんなものだった。とりわけ、これで未来の天皇の外祖父と決定したも同然の清盛の喜びはたとえようもない。嬉しさのあまり、あたりはばかる事もなく声を揚げて泣いたのである。あの傲慢な清盛が、嬉し泣きに号泣したというのだから、この事がいかに平家一門にとってこの上なく目出たい、重大な出来事であつたか容易に察せられる。世の中の人の誰もが、これで平家の天下は未永く安泰であろうと想像したのである。しかし、人生は、栄光の絶頂にある時、既に、どこかで静かに下降・衰滅がはじまっている。それが「盛者必衰の理」というものである。皇太子御誕生という慶事は、同時に、これからの平氏の暗い運命を暗示する前触れだったのである。

それが現実にはつきりとあらわれたのは、治承五年（一一八一）

のことである。正月十四日、高倉上皇は、御寵愛になつていた小督局が清盛によつて追放されたことを深く嘆かれ遂に崩御され、次いで二十八日には、清盛が突然の病魔（マラリアであつたといわれる）に倒れ、高熱に苦しみ抜いたすえ潤二月四日この世を去つた。平氏の象徴、清盛の死こそまさしく一門にとつて凶兆、この瞬間から、平家はさながら坂を転がる石の様相を展開した。

中宮は、上皇の崩御により院号を建礼門院と称せられた。高倉帝の御后になられてから十年目、御年二十五歳の時である。幼帝安徳天皇の御後ろ見と同時に、清盛亡き後の平家を一身に背負つていかれることになつたのである。しかもその平家の運命は過酷に迫りつつあつた。寿永二年（一一八三）七月二十五日、平家は福原の内裏に火を放ち、帝をはじめ、一門の人々は皆船に乗り込んだ。この日平家はいかに都を落ち果てたのである。これ以後滅亡までの約二年間、平家は西海の波の上を漂うのであるが、その間、相次ぐ源氏との合戦で多くの親族を失い、いつ終わるともない海上での流浪の毎日に女院はいかに心痛されたことか——。西国長門の壇の浦に追い詰められた平氏は、最後の合戦に一門の存亡を懸けた。合戦史上名高い壇の浦の戦がそれである。この合戦で、幼帝安徳天皇は祖母の二位殿と入水され、同時に、ほとんどの武將や女人たちも投身した。女院もまた、海に身を沈められたが、源氏側に助けられた。こうして一世を風靡した平家は滅亡した、時に文治元年（一一八五）三月二十四日のことである。

この後、女院は出家され、落北の大原の寂光院に粗末な庵室を造り、亡き安徳天皇や平家一門の菩提を弔いになる。天下の国母と仰がれた方が、自ら仏前に供える花や食用のわらびなどを採集される

という佗びしい清浄な生活。お側に奉仕する者は、故藤原信西の女阿波内侍と故重衡の北の方であり安徳帝の御乳母であった大納言典侍局のふたりのみであった。建礼門院はまさに平家の悲劇の象徴的な存在であるといえよう。

## 第二節 六道を生きる

ひっそりと寂光院で隠世の女院のもとに、文治二年（一一八六）四月、突然、御舅の後白河法皇の御幸があった。しかも法皇は、源氏に令して平家を滅亡させた首謀者、いわば平家一族の敵ともいべきお方である。

女院は、世を厭ふ御習ひと云ひながら、今かゝる有様を見え参らせんすらん慚しきよ。消えも失せばやと思し召せども、かひぞなき。  
(灌頂巻 「小原御幸」・629)

昔の、あの華やかな中宮時代に比べると、今のあわれな尼姿の変わりようを思うとき、女院はあまりの恥ずかしさに、このまま消えてしまいたいと思われた——おふたりは、今は恩讐を越えて懐古の涙の中に、心ゆくまで物語りをされた。その折、女院はその御生涯を、現世ながらの六道として物語られる。六道とは仏教用語で、衆生がそれぞれの行いによって生まれかわって行く（これを輪廻転生という）六種の煩惱具足の世界をいう。因果の理法によって天上を最高とし、次いで人間・修羅・畜生・餓鬼と続き、地獄を最下とするが、苦楽の度合いがそれぞれ異なっているのである。

ここではまず天上界について語られる。

女院重ねて申させ給ひけるは、我が身平相國の女として天子

の國母となりしかば、一天四海は皆掌の儘なりき。されば拜禮春の始より、一（中略）——長生不老の術を願ひ、蓬萊不死の藥を尋ねても、只久しからん事を思へり。明けても暮れても、樂しみ榮え侍ひし事、天上の果報も、これには過ぎじとこそ覺え侍ひしか。  
(灌頂巻 「六道」・631)

女院は、御自分の宮廷生活をこの天上界になぞらえられたのである。天上界は六道の中で最も楽しみが多く、悲しみの少ないところとされているが、もとよりその楽しみも永久ではない。そのことを『往生要集』には次のように述べてある。

まづ天人のありさまは。よろづ心にかなひつゝ。たのしみかぎりなければども。命のおほりになりぬれば。五衰のくるしみ。まぬがれず。  
(第五 「天道の事」・80)

楽しい毎日を送っていた天人も、死がくればまた六道の他の境涯に生まれ変わる運命を免れない。「五衰」とは、死が天人の身に現われてくる五種の衰相である。この時の苦しみに比べれば「ぢごくの苦はかるき」苦であると『往生要集』（第五「天道の事」・83）にある。源氏に追われ、住み馴れた都を落ちて、西海に漂いながら過ぎた昔を回顧し、懐かしい故郷に思いを馳せるといふつらく悲しい日々を、女院は「五衰必滅の悲しみ」（灌頂巻「六道」・631）と申されたのである。

次に女院は、人間界について語られる。愛別離苦・怨憎会苦をとり上げ、九州の地に落ちのびた平家が、再びこの地をも落ちのびてゆく苦しみをこれに当てられている。

凡そ人間の事は、愛別離苦・怨憎會苦、四苦八苦共に、一つとして、我が身に知られて、残る所も侍はず。さても筑前の國太



宰府とかやに著いて、少し心を延べしかば、維義とかやに、九國の内をも追出され、山野廣しと雖も、立寄り休むべき所もなし。

(灌頂卷 「六道」・631〜632)

人間界は、我々人間の世界で、天上界の下に位置している。「四苦八苦」とは、「四苦」が生・老・病・死の苦、「八苦」が「四苦」と女院が申された愛別離苦・怨憎會苦と求不得苦・五陰盛苦の四苦である。これらは人間界が持つといわれる三つの厭うべき姿の一つとされている。

九州の地を追われた平家は、「波の上にて日を暮し、船の中にて夜を明かす」(灌頂卷「六道」・632)生活を強いられた。

賈物もなければ、供御を備ふることもなく、適々供御を備へんとすれども、水なければ参らず。大海に浮むといへども、潮なれば飲む事なし。これ又餓鬼道の苦しみとこそ覺え侍ひしか。

(灌頂卷 「六道」・632)

餓鬼道は地獄につぐ苦難の境であるが、飢えや渴きの苦しみに満ちた所である。女院はここで、大海に浮かんだ平氏がいかに飢渴に苦しんだかを話しになる。そしてこれを餓鬼道になぞらえられた。

明けても暮れても、軍よばひの聲の、絶ゆる事もなかりしは、修羅の鬨諍、帝釋の諍も、これには過ぎじとこそ覺え侍ひしか。一の谷を攻落されて後、親は子に後れ、妻は夫に別る。沖に釣する船をば、敵の船かと肝を消し、遠き松に白き鷺の群れあるを見ては、源氏の旗かと心を盡す。

(灌頂卷 「六道」・632)

修羅は、瞋・慢・疑の三つの業によっておちるところで、常に心に怒りの焰を燃やし、驕慢による苦しみと、疑にもとづく恐怖とを抱

いて鬨諍の日々を送る世界である。この修羅界は、戦乱の多かった時代に生きた人々にとって最も身近に感じた世界であろう。それは中宮といえども回避することはできなかったのである。女院は今、一の谷の合戦における合戦後の日々を修羅に例え、戦乱の世を心から厭っておられるのであった。

次に女院が物語られるのが地獄のことである。地獄は六道の中、最も苦の多いところであるが、地下一千由旬から四萬由旬までの間に、層々相重なつて八つの地獄があるという。上から等活地獄・黒繩地獄・衆合地獄・叫喚地獄・大叫喚地獄・焦熱地獄・大焦熱地獄・阿鼻地獄となつており、最下の阿鼻地獄は無間地獄とも呼ばれる、最も罪の重い者がおちる所である。清盛の死去の際、前に「無」という文字が書かれている「閻魔王宮よりの御迎ひの御車」(巻第六「入道逝去」・392)が二位殿の夢の中に現われたが、これは清盛が無間地獄におちることを示している。

さて、ここに書かれているのは、その第四の叫喚地獄と第五の大叫喚地獄である。殺盗姦飲酒を犯したもののおちるところであるが、女院は、壇の浦の合戦をこれになぞらえたのである。

御涙に潮れ、ちひさう厳し御手を合せ、先づ東に向はせ給ひて、伊勢大神宮に御暇申させ給ひ、その後西に向はせ給ひて、御念佛ありしかば、二位の尼、先帝を抱き参らせて、海に沈みし有様、目も眩れ、心も消え果てて、忘れんとすれども忘れられず、忍ばんとすれども忍ばれず。かくて、生き残りたる者ども、喚き叫びし有様は、叫喚・大叫喚・無間阿鼻・焰の底の罪人も、これには過ぎじとこそ覺え侍ひしか。

(灌頂卷 「六道」・633〜634)

御母君である女院の前で、実子の安徳天皇が二位殿に抱かれ、海へ投身されたのである。それをどうすることも出来なかつた女院―母親にとつて、これ以上の苦辛があるだろうか。まさに地獄の苦しみというべきものであつた。

最後に畜生道について語られた。女院が壇の浦合戦後、捕われの身に都に上られる途中、明石の浦での夢の中に、先帝を始め、一門の人々が現われ、

二位の尼答へ申し侍ひしは、龍宮城と申す所なり。さてはめでたき所かな。此の國に苦はなきやらんと問ひ侍ひつれば、龍畜經に見えて侍ふ。後世よく／＼弔はせ給へと申すと覺えて、夢醒めぬ。

(灌頂卷 「六道」・634)

と。「畜生道は衆生の中で最も多く、鳥・獸・虫・魚がこれに属し、性暗愚弱肉強食の世界とされている。国文学では龍がこの畜生道の代表となつてゐる。龍はインドでは蛇のことだというが、これが理想化され、『神通力を持つとともに雲を起し、雨を降らすものとせられた』のである。平家の尊信あつかつた畿島明神は龍の王、『娑竭羅龍王の第三の姫宮』(巻第二「卒都婆流し」・112)の垂跡とし、その祭神市杵島姫命を龍女の化現と考へてゐる。このような龍王思想が、この一節の背景をなしてゐる」といわれている。女院はこの夢によつて、その後いよいよ安徳帝及び平家一門の菩提を弔らされたのである。

以上、女院が語られた六道のことをここに付記したのであるが、後白河法皇が、「異國の女舛三藏は、悟の前に六道を見き。我が朝の日藏上人は、藏王權現の御力によつて、六道を見たりとこそ承れ。頼り御覽せられけるこそ、あり難う候へ」(灌頂卷「六道」

・634)と仰せられた通り、生きてゐる間に六道の総てを体験するといふことは、聖人にしてはじめて可能なことである。それを、女院は体験されたのである。そして今、ここに女院はその迷妄の世界を越えて、永遠の寂光を求められた。しかし、後白河法皇を御前にして、この物語りをされる女院は、すでに、御自身が願われている寂光浄土に生きられてゐるのではないだろうか。なぜならば、前述したように、後白河法皇は安徳帝や平家一門滅亡の敵として、女院にとつて、最も憎むべき御方なのであるから、大原御幸の時、対面されなくても不思議ではない、「消えも失せばや」という心中には、ただ「今かゝる有様を見え参らせんずらん慚しさ」という理由だけではなく、その心底には、「いまさらどうして私の前にお姿を現わされたのか、私の子や、一族を殺した方が……」という怨情もあつたのではないかと思ふ。それが通常の人々が持つ心情だと思ふ。それを、女院は法皇と対面され、静かに現在の自己の境涯について語られた。これこそまことの悟りの境地に入つておられるお姿であろうと私は思った。

やがて年月もめぐつて、建久二年(一一九二)二月中旬、女院は病の床のひとつとなり、「日來より思し召し設けたる御事」(灌頂卷「御往生」・636)、阿弥陀仏の尊像の御手にかげられた五色の糸を御手にとられつつ、世を去られたのである。

御念佛の御聲、漸々弱らせましましければ、西に紫雲たむが躰たむがき、異香室に満ちて、音楽空に聞ゆ。(灌頂卷「御往生」・636)

こうした貴い奇瑞の中に、太政大臣清盛の女、安徳帝の母后建礼門院徳子は、無常転変の現世を離れ、永遠の浄土へ旅立たれたのである。

女性として最高の地位に在りながら、女院も最後には、妓王と同じく、弥陀に救いを求められたのである。

この「灌頂巻」は作者によって、『平家物語』全編のまとめとして、一つの結びの巻を意図して、新たにつけ加えられたと考えられている。本来の『平家物語』は、「祇園精舎」の序に始まり「三位の禪師斬られて後、平家の子孫は長く絶えにけり」という「六代斬られ」の結びの文に終わるものであった。しかし、もしこの物語を、盛者必衰・諸行無常の理法を述べたものと考えるならば、巻頭の文章を、灌頂の巻と照応するものとみるべきであろう。その意味で、この灌頂の巻は『平家物語』になくてはならない重要な一巻である。灌頂の巻に、戦乱の世、波乱の人生（無常）を歩まれた女院が、今は風雲の外に逃れ心静かに浄土を願ひ、ついにみ仏の光に導かれる（因果）という姿が描かれているからこそ、『平家物語』は永遠の名作として語り継がれる文学になったのであると私は信じている。

### おわりに

妓王・建礼門院と、ふたりの身分階級の違った女性を挙げて調べて行くうちに、結局、人間が安らぎを見出す世界は仏教だという事がよくわかった。それは決してこの中世時代特有の思想行為ではなく、八百年経った今日でも変わっていない。こうした考え方にたつて、その当時をしのぶ時、私の心は何となく妓王や建礼門院の心情に触れることができたように思われる。と同時に、今後、人々は心の救いを宗教に求めてゆくであろう。

私は、高校の頃から卒業論文を書くなら絶対に『平家物語』と決

めていた。その願っていた通り『平家物語』を手懸ける事ができた。その事は、私にとって忘れることのできない大切な思い出となった。さて、今書き終えて改めて考えてみると、私なりにやったつもりでもやはりもっと資料調査をしておくべきだったことが後悔される。しかし、他面では、勉強途上で得たいろいろな経験によって、私はより一層『平家物語』への愛着度を増すことができたことを確信している。

注(1) 『平家物語』（日本古典鑑賞講座 第十一巻）高木市之助・富倉徳次郎編（角川書店）（53）による。

『要説 日本史年表』宝月圭吾監修（山川出版社）（14）によると「長承元年」。

(2) 『平家物語』（66）による。

(3) 『平家物語』（77）参考。

(4) 『往生要集』恵心僧都（永田文昌堂）

「第五 天道の事」より

一つには。花髪たちまらにしづみ二つには天の羽衣も塵垢にけがれ三つには腋のしたより汗出る四つには。兩眼しばくめくるめき。五つには本のすみかに樂しまず是を五すいとなづらける（80～81）

(5) 『平家物語』（27）による。

(6) 『平家物語』（27）参考。

(7) 『流布本 平家物語』（昭和校訂）野村宗朔校註（武蔵野書院）（636）による。

『詳説 日本史』井上光貞・笠原一男・児玉幸多（山川出版社）（85）によると「建保元年（一一二二）」。

参 考 文 献

『平家物語』（日本古典讀本6）

永積安明 日本評論社

『平家物語』

石母田正 岩波新書（青版）

『平家物語 若い人への古典案内』

長野尊一 現代教養文庫 632

『平家物語』（シンポジウム日本文学5）

山下宏明司会 學 生 社

『平家物語』（日本古典鑑賞講座第十一卷）

高木市之助・富倉徳次郎編 角川書店

『往生要集』

恵心僧都 永田文昌堂

『平家物語』（日本の古典7）

鈴木勤 世界文化社

〔評〕

澤田さんは、一年のころから『平家物語』に関心を持ち、卒論には、悲劇の女人群の中から「妓王」と「建礼門院」を択んで、その仏教思想を研究のテーマにとりあげている。

『日本古典鑑賞・平家物語』（角川書店）を手引きにして、忠実に原文を考察し、その経過をまじめに論述している。しかし、「妓王」の章で、毋刀自と、処生の道について語る妓王のことに、滲む心情の考察が軽視されているのは惜まれる。また、「無常観」について、現世を否定する妓王と、現世を肯定しようとする建礼門院

の中世的な「女人往生」の真情についても言及してほしかった。や、欲ばりすぎた要求かもしれない。

とにかく沢田さんらしい几帳面さと堅実さをみせた若々しい論文だと思ふ。  
(野崎アサエ)